若荷

上

中村俊定文庫
文庫 18
804
1

備後文庫

若荷集

尾道市立図書館
尾道市立図書館
尾道市立図書館蔵

此こゝ数さゝ日ぬ居らとゝいひたゝぬる詠み者と
い家れ北とゝ数の法家紙美し所ゆゝと
この方とゝ数ゝ寺ほゝて枝のうゝらに
飄ゝ居家ゝわ所ゝ北ゝ数日ゝ幸ぬ
ゝゝゝ数ゝ士者ゝいゝをぬゝて世ゝ孫の
墳墓ゝ法孫ゝゝ加ゝて所ゝゝ仏ゝ

いのちを捨てしねのみを求むるに仏の祈願
仏経を供養せんとおもへども貧窮にして
密書紙作りて一家の男女を唱へ言ふの歌を
聞くに人をして菩提の心を起さ
しめるとのゆゑに不信士あわれみ
誰慶の中に入いるのゆゑに毎月の
庚待照宮より善男善女勝れたる祈願を
よせたまふ人あまたなれども仏の事うとしとまれるむの

[illegible]人の求[illegible]あしとおもへ
ども孔雀王の[illegible]なほうく於[illegible]れ
かんして仏不事をうとうとすれども
年所[illegible]祖翁の法を[illegible]
この[illegible]孔雀王[illegible]
[illegible]感あわれ
[illegible]の家の[illegible]
しかの[illegible]経[illegible]

志ゐしの長坂にあまてあまのねくこ社を
詣でをんを志ゐ薩波羅密の妙を
たとう細物しぬむとのをるもはけをを
ねのをんをて写れぬを物ぬきうんをを
ぬて紙法花士のほをふを打て紙ををに
芭蕉めをれ回れ物ふ表入り身をんる物
ぬし一日のをいうんはあ物ふのを一日の仏を
一生れ世紙を学をのんを二年れ仏ぬ

十年二十年のをいを学ふいあをんを字学
酒をを学ぬるれ学れをて百業の快楽を
ぬん事ぬ業ぬ事をのをとをむや 不二豊
字捨物のをを

書

此編輩を於てよわかく年を重ねまハ
この集さのすりものの外なえて耳あわゆる句を
おかくあるを仙あとゝ外りて外の名のみとゝめ
あるもまたゝれりとねと後人其拙をいとう懐旧の
ひるまゝ心なる古人をおもてするゆゑく句を又まつ外ゆる
あらはすこの

時この業拙を弥指をまつれた集撰みる外堂
碑の五百のそわ外るをかるのゝ外まゝ或の補ひ
をるもあるゝこのそるを後集をみすの句

此都のひろきゝ外のそゝ外ねをすゝきゝのまゝるを
発を後集の幸るゝ一年のためをつくまゝりとせ、、

四村家の俳諧堂号号なるのたゝ楼号の校本号
のゝときゝの家をれ敏依仏りみて号を外出るを
こゝまを省とゝ仁枝氏の翁塚の本廟の記を
れをゝれをこゝまゝをいあす

知己の句をよひ撰者の句をおのくのをるを発
坂東の五吾のゆ典を納め吸れ因外れ詠歌をな
ゝのゝをれの婆心のるゝのゆゑこをゝ但るゝ人の
句の多きを撰者の旧なるまゝをゝ外ゝ

集中撰者の家俳を号をあらをるを見外きを
外まゝといをゝの外りゝ不外りいをるを外れ

芭蕉庫

駿河臺中坊家にわかれ初代文庫を往昔寛長五年はじめていとなみそうそうより四十五年の春秋を歴て明暦三丁酉の秋入門舎国庵おとしく烏有となりぬ此庫たゞ幸にのがれたる家蔵を公事にかりて矢しく南部にあとをとゞめ老を演雨氏に托みこの文庫に庵を底とし焼失のあはれを色こゝにぬこまるを亦二十五年ほろとろ雨のこゝろもや芭蕉翁伊賀に托したるよりの来歴を書

さてこの茶碗をとく見るに和の翁の都の風雅を
はしらしめ給ふ揚羽のはしめなりとうけたる此
濱崎氏もと伊勢の人なるの津の藩
より出て遠八代とうこれらの人のひくところ
なりて後は氏文庫をたのしくれ庫にて
ありしをこの板屋の紙とけ物尽くしこれ
保川の宗旦なるべしとうきこゆるひとうつて
一百余年の後文化巳巳濱氏の孫すれ君命を
おうけ給はりこれを拭きこれをるり巻きるる
いり一人をもてこれをうけてこれを
の古作紙ものを浪の器をにてうきふ

このまきものをもちなるこしを他のものてはきく
氣をこかち雪の史を得てしるるる
ゆるくをを称きしより
ちをを庫と語しる花入の記みえるる

美しの秋や橘ふかれ月のとうす　成美
秋をとるむや　はるか橘花夜の雲　雪笠
ちちとのの花かせとをきむりて　陸奥　乙二
橘を出て言我外ふるるるの　茶静

橘や百夜ハ月の芭とらう哉　碓嶺

春しき橘のかもおもひけり　相模 小田原 菜丸

みちさ花のひと抱ある白きの花　大坂 奇渕

たちはなや端ち嗅まてむせかへしめく　呂夜

五月雨塚

関口龍隠庵にありて（もと芭蕉と称へし庵）寛延三年八月子光

子門人宗付其角等か建るところ也此地や昔

ちかき翁かれ小石川の水道をおさむると云す
志はし庵すみれたる旧地なりとぞ絆に
其の頃のまゝに役椿もさそれてありけはしの
趣なり似りとて芭蕉をまゝ八今に椿の名
をたゞ侍と呼といふ文ある人のあり此川上
に深き鏡の淵といふにあれしをまゝに蹟を宿れ
おもはれまする山しとのまゝ八ヶの御り実に在
ゐまゝのちりめて其の如としめぬきんのこなそ示
古人をかれ先蹟をとうためて其の碑を築
それ文いはのところなや此碑のさきはしれ
芭蕉堂をいとなみ小肖像を納めまかる識の

空堂と書しを
翁の古徳不白りをたちの一像紙
作りて物のめ作遣はしに文化中廃
堂とまわて像をうりて唐中より恐尺
高り社中まとちまわ書ととそ

さみてまの覚悟ほ別や芳大めく　京　蒼虬
五月雨や夜ゝのまてこうとれ侘　大坂　茅宙
作弁孔を山葵の葉ふとほとうる　小総　素行

さ見の孔や霧ゝ人ゝゆる、　桂丸
青梅や桶ほ是すまてよいなを家　近江　可盈
まなゝ生のきこのて松れ野　伊勢　うほ
寒花めんあや見ふ立嵐内ふ　お掖　槐堂
南天花ゝ弁ふりのまとと　摂津　桐栖
ぬまゝ二夫ふ外るの日ふ　但馬　芳子
山ひて屋敷ゝちて芋ちけふ、　眠竜
芋ふのきこの流まゝりわのむこと　仙嶺

無そうて花ゆくるれ小百合哉　可松

ふくいなと家うらのかめる牡丹哉　越後　弄山

夏草しと野の家て落るや家れ宅　松頂

夕あわせ夏するや夜の紫蘇畠　有宜

ねつのき貝の氏の神花えすすり　下総　廣陵

花れら茨すするや畔ばえ　肥後　未子

矯鶯形くや垣根投子田植の　老い　桑明

苗礫作き形手ぬきに人ぬぬまけて　陸奥　士由

よまこ世とて田植るや植るやきたれる　出羽　御風

なのと起のて菓の是しりかよ教ほと　ル丁

なるこいしと抜てるみのそて　下総　雀老

幸に竹の月ちあるるるるるるの　若狭　手壽

よきわれにあるをさせくそ雷　蕉雨

雪の窮毎ちあるるるるるいの　上総　鹿大

痩蕎の月のとうまして雪の窮　京　岱雪

月の出て家ゝ花まるゝ水鶏ゝ　大坂　七爾

身は花をとるやみの影のあるまくら　尾張　月庵

ふるこゑは小雪ふるなる雪の中　老樗

あやまりて雪をかぶる木かや　寒松

小雪や花をとゝのふまこさるく　出羽　このとり

竹のあや裏みて秋きもはらち　大坂　井眉

秋ゝ雪ふるこゑ竹植ん　尾張　而后

植やうの背の気ふく小作ゝ　沙路

竹植てふるゝ能業の秋　出雲　子荻

あり植て垣せまるん月まるん　上野　茅丸

休は紫ゝ味ふく雪の五月の秋　物二

竹ふるこゑのうゝ秋とゝあけ屋すき　風谷

うふくまき坂の初こゑ上弁ふ月　太郎

ゆ雲ふこゑ雪ゝ秋ふ月　お掃　薫岱

坂屋ふふく思やゝ赤蔵のあるゝの　常陸　牡年

坂やふまこゑ水ふるゝまたゝ秋　上野　芦邦

雪は月学ハ雪にいふゝや　雪史

名残月ぞめしとまてかりそめ　九朴

残月の夜は月とまるまぼろしの梨　摂津　暁雨

明安き松のかゝりもとや　名残面　信濃　そむち

むく起のめてゝくるあの明るまの田ゝ　出泉

ゆくさいまを投歩す青田の影　女　李江

古寺の清水ゝ流水の郭　家慈

山清水青のかゝりなるまけ　諫圃

ひ数新や笠ゝ寄てゝ寄るまよりゝ　女　寄英

名月や月のかゝるとまてゝ　名水

名月や横貫ゝ俵ゝ　宇橋

老ぬきや子ゝ吹ゝ人の峰　旅旋

夕立は法きゝ数木立ゝ　崔布

蚊帳月や数ゝ掛る蔦の葉　甲斐　曽人

けとゆきゝ人のもるやはら飯　京　芸是

すゝとゝゝの家は名の影　淡路　李村

涼しゝ佐や水ゝ心をうはまて　甲斐　一作

涼しさをあけて引こむ小家かな　葉石

古池

淀川元番所松平遠州侯邸中にあり
芭蕉庵の旧跡なり

山吹を植ゑまさんと蛙の声　袁丁
やまぶきを活けて喰ふ菓子かな　雨叢

蛙まなかちわくちちゆき光るなり　吏牛
蛙の影のちるやゆるるを枕　越後　東嵩
山の寺や咲ひるてくるるなり　お掛　蓑児
蛙の声きゝ分ける相模哉　潜水　加賀　草均
うくきけたきの高さは蛙　陸奥　素郎
神垣夜の風聖まるまるしき　大坂　笠翁
松ちるの岩ふこすの居て蛙のえつ　伊豫　米年
時雨て来て松ちり吸ふ蛙の影　程二

百人ばかりて葬る畠をこのそばに　吹石

を建さるよりの名はかくれ　陸奥国二

うきあらや　蛙はかりの老樹　茱静

二月の雲をそよみかくるそば　宇橋

墨直塚

泉川海辺大工町臨川寺より玄武坊の徒の建

るところ元翁佛頂禅師より系禅の旧跡し

清水谷侯記
奉白地

堂中禅師と翁と同会の木牌あり亦堂中梅

花佛等はかり碑あり

時雨塚

泉川袋下町長谷寺より元禄七年翁の短冊を

うばひて塚の名とす彩史邦の小文集の序に

香〳〵す塚はかとり其嵐雨誓の碑あり こまハ

寛保三年翁五十回忌のとき眠柳居義あるの

あんをもとめまるとそ　亦佛頂禅師乃

古屋陽といひ居るなり

初さくまてそまよりの花しかり　陸奥　冥こ

二月ふすしかりてさてそ花　但馬　梧堂

山吹花やとりの水ふくしはの花　越後　雪才

そそてこあて行そ歩の似て降し花　丹後　葵亭

みのくまあわこ行隆寺花　小総　西塘

寺しの脇ふるしし九花ふ　丹波　鬼楊

九くまあて夜ふたきはる河ふ　美州

たこ花なと苔しして色冠れる　松頂

しくまこ寺のつるや　摂中　鉈夫

指花頃のしら花はるる河ふ　三河　永角

たかまふと月夜ふ寄長蕪の松　景山

寄家そし花ふ一とかしみ　因幡　寸風

ふの書て宿の礼いふたれい　義郎

文ゆくや花くまふ第一服の中　伯耆　白牛

よいそ花の袖て茶炉くま　古水

明ほのゝ寒てしも雪ふり是れ家　甲斐 百二

若菜やしらしたれの二度三度　但馬 笠仙

おもかげとなれたるなれきし寒さ哉　尾張 少汝

夜さむに膝も折らしまちた衾かな　但馬 竹魚

俤塚

深川六間堀要津寺にあり宝暦十三年十月十二日
雪中庵蓼太芭蕉翁の画一枚をとりためてしるしを
きつきておもかげ集をあらはす碑は雪中
庵歴世の碑あり

芭蕉庵

同寺門前にあり翁七十回忌のとき蓼太建之堂
中に翁の小肖像安置す庵の額は芭蕉翁自画文臺
一脚翁と杜国両吟の紀行一帖嵐蘭追悼の文
讀等蔵之此おもかげ集に委し

蛙塚

因幡池邊ニあり安永二年四月十二日普成建之
碑面ニ源川親和ノ書之

渡鳥塚

砂村新田元八幡の森ニあり文化二年初秋建之
柳原源三郎と云ふ者社改選ニ托そめハ幸山
雲を帯て連り流れ来る鳥を巻てきつる美京洛
勝地也

女木塚

小木葱(ナナギ)澤勝智院ニあり林ニ添てゆるゝ赤ハ
小松川と云ふ句を賜て其日詩聖逸ノ社中建之
言吟の花ぞまき所ニうるゝて外ハ陸奥
はるゝ

外のしあんりハ林の九まき　大坂　月香

ゆくさきこゝろ分ておくるや社はなき　但馬　兼房

行てみる社やなくなる社三軒家　摂津　李長

吹ちらしものの花よりはきの風　大坂　尺艾

はるゝ又もゝ京はるゝ日は秋のそら　京　宣雅

社の春をゝ定葬りおこわけり　伊勢　金垤

送り火を消て家もつまるとゝ　志摩　祇岳

鶏やけるゝ百とこゝかて梅の枝ち　玉光

云ゝ哥してりけるうらゝ春は　但馬　先哲

鶏鳴の言いとゝろや百古は哥　生駒　聖松

時のこゝろとよるまて来る芋一茎、　仙風

四月向をうちらへくる行の野　川嘯

社の日の中へとゝむ日よりの茶　葉静

いなるにまやいらの野まてをのうへ　陸奥　紀龍

はきとよりは花やなるにあはれの　平芋

一度来てきりしはなれはなれ　尺量

とゝのとに社のとゝしの春とあり　近江　士明

秋花庵のかりこけるかりうち　及湖
秀よ気を法ゝ[illegible]秋矣　出羽　渭南
永して著よりゆ合歓花秋　樹村
残る夜の人よ[illegible]中ゝ[illegible]　流水　芳中
れる故秋[illegible]　帚杖
秋雪の[illegible]勝手也　木雪
唐ゝる[illegible]の角[illegible]ゝ　起星
ゝ[illegible]て[illegible]暁の唐　出羽　加年

先ゝ来る唐の白ゝ[illegible]　岸居
唐船し拾[illegible]ゝ　大和　李冬
[illegible]ねのゝ[illegible]国ゝ　播广　玉屑
赤ゝん和尚の彼岸ゝ[illegible]　武蔵　光彩
[illegible]ゝ　ゝ総　三化
芝好く人と歩ゝ[illegible]ゝ　摂津　呉志
[illegible]ゝ　伊松
[illegible]ゝ　摂津　鶴雪

陸の すきまの 奥 さぶるむ　信濃　武曰

もりたる 日の ちくさの 尾花 哉　出羽　渭虹

月 出 よりて たをさるる の むら尾花　京　貞興

あれ 行の 消 ん とて 母 ら すき　人克

家 ら し なる 夕 ま の 芒　京　茂良

夕 より 夜 に 入 の 萩 の 影　吏牛

萩 の 陰 ま 夜 ま 入 て こ ぼ れ ぬ　老樗

ふ と こ ろ へ 雪 の さ ら る る 夜 ま ね ば　茶静

世 に 咲 る 日 雪 る 外 の 月 さ ら り　薩广　琴洲

日 の 暮 る る 夜 よ り こ ま り し ま す　陸奥　午巒

巢 を 出 ま 八 行 の ほ し ら の ま き ま わ　對馬　暘坐

巴 を 向 れ あ り し 月 ま ま る 月 ま　妙雪

乱 る の 五 十 ま 八 大 年 よ り 夕 ま 月 ま　摂广　舍律

た と 時 の 来 ま ま る や 小 松 灯　宇檜

時 の 月 ま 林 を と り ま る ゆ ま 月 ま　近江　亜淡

小 波 し れ 巢 ま の や 時 の 立 と ま 不　雪豆

あんまとのこれて葬れる実葬　但馬　菴

同會塚

本所猿江泉養寺ハ延享元年千梅梅尺建之ものなり　むかしあの五本松といふところ　ゆて川上とあの川やゆ月の友と称し　あるひし　生涯をうたはめ　まハ五本松ばかりなり　いつよりか会塚とも称とも那律師を　なぐさめたるなり　ハ那律の墓

芭蕉堂

本所弘田森茶師堂ハ　ならんみのの文化六年　矢の房春里　彼岸ごろ　の肖像を安置　すはりれ　蕉堂の古木　ありてうれの　ものの名なり

人形ひそかするなれ加　花川子
よきぬの春のなるものえ　陸奥　京卿
ちるの鶯　在　ばかりなるほ　光陸　菴北

[illegible]する[illegible]　越後　行里

起しに[illegible]　但馬　蓬子

眠[illegible]　[illegible]　蕉雀

見[illegible]　但馬　吳雪

[illegible]　芳洲

[illegible]　千秋

[illegible]　古稀　[illegible]　巢丸

古稀[illegible]　[illegible]　鳴晴

途中[illegible]て宿[illegible]　生新

[illegible]　下総　魚文

[illegible]　宇橋

[illegible]　栃地

[illegible]　榮靜

[illegible]　常陸　栃丸

[illegible]　[illegible]　[illegible]　播磨　路秀

羽音あてきこゝやゝ一日　杜鵑　陸奥　樞村

時しも夜をとよくうんて蛍や胃魄　をに　蛍洌

世界のいたるあまうゝ子宇　陸奥　雨考

胃をひるをはれ月をまえてはるはけそよ

杜鳥時しも沈めりこゝあまき星　信濃　洌香

然るれゝ恋のかるをもつのるる　鶯雁

子規耳よひゝ目よ三聲　伯中　又か

余れをすれをもれ鑒れつ帝魂　武蔵　かてき

百舌鳥ふるまふ八月百日の月　古梅　白令

外花やちれ月つけてるはすき　信濃　この原

ちらせ芋子れ雨まはるまてこゝ鳥　但馬　なのや恩

ふるはつ大日ちゝ芝話なれき海　陸奥　曰人

桃青堂

本所京庭東盛寺よりの寛保三年夕百唐

る光子の建てたる彼堂の仏の肖像を安
置す其後文化中菩提寺白芹なる比丘紙
幅四寸堂中板仏後の西方の像素堂以来
厨子の像あわせ作る書かいしかきの手なり桃
青寺といひし名事をぬかりてなりて
芭蕉山といひし額をうちたるより桃青の名
おて肖うまとあるとて平生よりおもひ
なりの桃青の号を支考らいふる梅子
いまこと熟せしかりて別に出ところの
らむ麻布といふ所なる桃院といふあまに
必深郷なるとあるところあらむ又何ら人の

再案公羽傷于李白
号桃青之證詳見
兼山麗澤秘策

いる詩に名梅といふ句り彩桃相同し路を向
まて至て白きものなるまくに見ゆる百の空亦
よりらるいとこの味ひあるんの仏の人を又李白
解しの桃青るらむ義なる杜を拾を考え
ちるとまるれをかるしすを解らむとまいる

助老碑

本石於紫山の池洲の仏の天明四年大李十二月
絢堂素丸子門人巣番不二翁建之林中桐
梅記す

手ふるとらんとまつやすらむ落葉かな　尾張　岳洛

うすき紅葉ものこりて冬ごもり　菜静

稀なりてきやの紅葉のうすかるる　虎哉

一はつを林ぬるりなるみちの秋　武蔵　竹山

人の気化ものかとまきこの紅葉かな　陸奥　茅南

ものからの実にて霜襲ゆり紅葉　宇橋

盛りとて幹よ若きむらみちる　大坂　釣翁

紅葉こそ人の紅葉ものかるるかな　百穀

三日月をゆかの上の紅葉かな　石川　素律

ものふしとあらしゆくるみちの紅葉　但馬　唐外

冥加塚

市所亀戸天満宮神社の上の方の事和二年
二月廿五日一百廟九百年忌を志のとき霊中書
完来社中建之

萩塚

因幡弦服寺入りの四和五年八月葛飾絵堂
素丸子禹平卿自筆建之園中萩花〻宿
萩寺といへ

はなれなれたよりなきや咲く小萩哉　心非
あまりなれて播婦とあや萩花　甲斐　蟹守
著物ら子著すとりや萩の宿　播广　千丈
物のこの萩きのふ人のとるや　芳午
咲るを人ふ著れたよ　少老　湖橋

あるかとはけく落てあらそきの花　京　十丈
ふよりる物つたまま埼一晩の星　武蔵　白度
七夕れものこの月のうつみきし　京　五芳
物の川木ふ咲て咲たるか　可景
盆いまく宿の鶯咲花を　石波　路里
鶯鳴よ初てるいくあら　武蔵　可布
あと息れ日ま東ら出ふ　陸奥　柳村
葉ふ〻中し物見れ花に示　仙台　于當

八翁の新日ゆきと合せられ　台て
新宮社の初てゆて参るの所〳〵　宇治
参られる花のちらぬうちと言ひ　陸奥　ち人
息子てらみまちらの雪　雪史
清伊の物の咲するの門のうて言き　三河　林拳
ひとりの見るのもの雪の花きみられ　湖山
きをきあと雪れるけしと存きる　鶯雅
大分寺まつゆまず寺やの雪雪の　杜英

花咲て月夜をまちやの恨根学　釜吏
ちと明まこハれるすし学と花すき　加賀　鹿古
陰のしいとうるの彩て女郎花　竹言
花の月やちらしやして来拾枝　梅仝
本ちきと城のこれるく抜る彩　菜静
きつこれのれるまれるの咲て拾る　吏牛

花塚

奉而押上大雲寺入ノ寛保三年十月翁五十
回忌仏善の為めに自主庵祇徳ゝ為て
を宝暦五年の冬門人松村桃境等こゝを拓
きひらくとうとて此桃境とゆるを祖翁有孫
北人ゝとゝきゝわ

とゝまるはしめ清りやうまゝ尾花　京　尾全
花ちるゝ日のて高まつの枯尾花　紀逸
引ゝ出る赤ゝの月やゝ社尾はゝ　湖山

尾花ゝまゝて人の形つりき　肥前　鞍風
ちるゝとゝとゝ人をゝるゝやこゝれをゝ　陸奥　角二
人まゝしゆ枯すゝ芒ゝ社をはゝ　尾張　梅間
うまゝ芒乾鮭とけてゝのまゝけり　但馬　林斧
なんゝとゝ日をゝつゝれ芒ゝ　可考
ゝるゝの心ゝあゝるゝこゝれかな　紅鈴　帝席
ゝのまゝ世ゝとゝ尻ゝ尻ゝ茶ゝ　筑前　一巣
枯世ゝとゝて時ゝ五月の為ゝゝ　武蔵　碩帝

春駒の起きつ臥すつまのうち　菜静

あやめと杜若のもとの島の蔭　松蘿（おはり）

川ぞいの柳のもとの藪の月　杜蕉（京）

江を九くとりてそなうまのの　一来（武蔵）

このまあしの夜を明くるかとぞ　宇橋

枯れたる葉のもとの芙蓉の　一蕉

山のまの枯木の梢や小六月　太橋（出羽）

杉の雇ひ人とまを神無月　茂雄（京）

十月の雪しろたえて西北ふる　孤梧

朝日さす二月の初しぐれ　海芥（越後）

その雲のかたちしと花ふるる　稀少（伏見）

花ゆ宝ぶきの芋の葉の裏　祥子（但馬）

蕎麦うちたてさとをかしく　宇栗

小春の日の路ばたの松ぬきうり　東琪（下総）

とむしろの服部法師の縄　李江（女）

春雨の日の笠の蓑の草鞋の跡　芝青（日向）

蓑苔孔小川　春雪　吐しぶ

氣井ゆく人雁ひしの　春孔雀　花川子

うま毎の日ち春よや野の竹　十紙　春酒

はまと春の春のつるしぶ　京　去卯

あるの西日よ向春春よりう　芳芽

和合みて野の小智孔ぬ　但る　九義

松ゆの庭のぬけてや春の月　十紙　白老

春孔日門る孔ちれ多回の秋　但る　圓夫

物て春ち春孔小家や春孔は、　きつら

春の物孔ちけ新ちて家ゆの月　越前　鬼洞

る孔春て秋ちるよりこのまま　但る　拙松

ちりしと足孔きちり拙やうき　芳樹

う家ちうみ子ゆ義ち春の花　越後　梨甫

出ちて春ち春ちるよ孔ち　お掃　里人

秋の春ちるとりて孔小春この秋　宮義

春ちみ春てしぶまのとりて春ぶ　上州　乙人

きらしとはるるうすちとり　一す

明るかやの内よりぬくるゝ　信濃　素槃

鶯の鳴てきこえぬ乳をるゝ　巣兆

小坊主の心そむくやみうさくい　陸奥　きよ

鶯の声よ抱いて寒しとや　蕉白

菊菊塚

隅田川白髭社の辺り梅の屋の門碑之文化十年

金令舎美知貴門人平貴り建る所之碑の色異樹奇

芳美一俗呼て花やしきといふ

いつまれうそしけやうの花園　桜津　本海

建うてゆる家ゆかわ梅の中　河内　未紀

うめの宵ちまを淀をくゆる　与洲

古き世を鄙ゆこゝろ梅花　淡路　荊玉

さくうめの花波をうつる　常陸　松江

ちるや咲梅一さいれ玉ゐ　　葉静

あるるや梅の小菊の莖葉　　斎休

行心明くてりけりと二つあの梅　丹後　百氣

きさらぎやさとしもうあの十五日　陸奥　俳佛

正月も志ろくうちこ梅のまち　　暉友

行くとみ咲れ和とまうあるを秀木こ　　蓬伝

紅れうめ豆腐を水はるるあり　武蔵　宝水

見るうるの春和まうるの春ゐ　小田　石府

畑中や南木ふきに二つあり咲く　　博義

春の梅れ木も痩るれと自ゐを梨　京　素琥

年れうちるるまて梅の日ひうり　　玉壽

野ゐ命るるのとあつそうめれる　陸奥　心伝

梅咲て二度まはまる春ゐ　伊豆　琢且

後ゐの味ち喰しめてう春の花　　経羽

うめうゐの散ぎ梅て夜商れ門　倶多　乙坡

梅ゐ月夜みるゐてやけこんか　　垸舟

中しの梅をこかとなれば　文つら

黒主なるうめを法しに男うめ　白く

うめくみよりの雲をまつの日癖ぶ　芝山

有かとの月の宮ちけてこのあの花を　志宇

梅うのうめたるまをすゆへ　珉古

うめくみ流の神小門のたをれ↑変　まを乱

千蔭して梅をとりも於青竹　雲岳

梅竹を遠ハ月はれたるなりき　信濃　八朗

う年ん竹香は這入て孔雀窓ぶ　光樗

梅花をかくしよりうまくき　小糸

うのあの玉乱於ぶきりまとる竹を蓋　一汀

大造は鶴戸ぶりうあの花　但馬　去尺

年花より乱梅昭よりうを鶴の色　安磨　一有

梅りうを竹雪りのてあるを色乱く　吉陸　烏嘴

うあよ風一日毋りれてうあ　翁山

たくうを雪のをを梅竹ぶ　越中　南流丸

眺てうつ花ちるまゝに梅ぬし使の船　甲斐　冊遊

うゑ人踏てとの山ぶきまゝに霞雀　凡志

ちぬしと梅見に負すうすめる　安芸　知功

ゆふの丁ぬしてうゑ花　ト志　その

うゑの花ゆまゝ木ふの花の咲ちり　但馬　梅千

月雪花ゆりとゝきしうめ花　信濃　宗二

春法の材よ石ぬきて梅のたゝ　お換　尚窓

くまうねてちりゆや梅のらる日おて　出雲　五分

夜ぶのゝとこゝかけめて梅花月　武蔵　太良定

うゑ人月夜の撰ゝ花ゝ外ゝ　筑後　愛五

ゆるゝ中人ゝ花ゝ本ゝ梅花　京　鳥頂

四一枝まゝてゆゝうめのゝ　名古　千永

花ゝ木のすゝるの梅花　三河　草池

うめゝ山ゝとゝゆしゝるゝ小春　大坂　万和